

第 36 回 CASCO 総会及び関連会合 報告書

報告者:(一財)日本規格協会 中川 梓

日時:2022 年 4 月 25-29 日

| | |
|--|--|
| Open sessions on CASCO technical work | 25 日 16:00~24:30(ジュネーブ時間 9:00-17:30) |
| Interactive sessions : Review of CASCO Structure | 26 日 16:00~17:00(ジュネーブ時間 9:00-10:00) |
| 総会 | 26~28 日 19:00~22:00(ジュネーブ時間 12:00-15:00) |
| Interactive sessions : Follow up dialogue sessions Regional Engagement with CASCO members and A liaisons | 27 日 16:00~17:00(ジュネーブ時間 9:00-10:00) |
| Meeting the ISO and CASCO leaders | 29 日 17:00~18:00(ジュネーブ時間 10:00-11:00) |
| Workshop “Conformity assessment: Embracing the present and preparing for future” | 29 日 19:00~22:00(ジュネーブ時間 12:00-15:00) |

25~29 日の総会、セッションに参加

場所:ウェブ会議

<<総会>> 参加者:約 130 名

●議題1 開会,

CASCO 議長 Mr. Reinaldo Figueiredo が開会の挨拶。今回もバーチャルでの総会となったが、次回は対面での開催としたいと述べ、メンバーの積極的な議論への参加を求めた。

●議題3 Appointment of the resolutions team

事務局長より、resolution committee 設置についての説明があった:総会期間中に resolution committee に諮問して resolution 案を作成する。最終日の閉会前に参加者に提示しコメントを受ける。resolution committee へ諮問し 5 月 2 日までに最終案を作成。1 週間の投票期間を設け、正式に決議を行う。

resolution committee は地域バランスを考慮し、以下のように設置。

- BOBS/Botswana
- JISC/Japan …中川
- AFNOR/France
- IRAM/Argentina
- ANSI/USA

●議題4 Update on latest developments in ISO – ISO Secretary-General

ISO 事務総長 Mr. Sergio Mujica が登壇し、ISO Strategy 2030 への取組みの概要を説明するとともに、key priority として、SMART 規格とロンドン宣言の 2 つを上げ、取組みの詳細が説明された。SMART 規格に関しては、ビジネスモデル及びユースケースプロジェクトに CASCO が関与していることに触れ、適合性評価にも大きく関わると述べた。

その他、2021 年の理事会及び総会の報告あり (COVID-19 に対応しての状況、リスクマネジメントポリシー、Regional Engagement Policy、CASCO 議長の再任、等々)。

会場からはロンドン宣言に関連し、膨大な ISO 規格を Climate 対応という点でどのように見直すのか、すべての規格が気候変動をサポートするものではないという主旨の質問があったが、対象とする規格の範囲を選び取り組んでいくとの回答があった。

●議題 5 Report of the 35th CASCO plenary meeting

N1132 に対し editorial error の修正を行い承認。

●議題 6 CASCO 議長報告

詳細は資料に譲り、いくつかのトピックについて述べた。

主な達成事項として、CASCO メンバーとの engagement meeting を行い CASCO 活動への参加を促したこと、CASCO の構造の見直しを開始したこと、CASCO strategic directions を ISO Strategy 2030 に沿って新規に作成したこと、いろいろな地域から WG コンビナを招聘したこと、メンターシップのパイロットを実施したこと、WG の information session を実施したこと、等々。

ロンドン宣言に関しては、CASCO としても貢献していきたいと考えており、各メンバーは国内の関係者にコンタクトし sustainability standards と CASCO tool box の重要性を強調してほしい。

WTO TBT 委員会は適合性評価に関する指針文書を作るために情報を集める立場にあるが、各国政府の WTO 関係者にコンタクトし、CASCO tool box の価値と使えることを強調する要検討願いたい。

スキームオーナーの数が増えている昨今、CASCO tool box にある規格を適切に選択する必要があり、スキームをどのように設計/運用するかの指針が求められている。

NMC との対話を行い、CASCO 活動への積極的参加を促した。また、COPOLCO 及び DEVCO 議長と 2021 年は 3 回会合を持った。今後も継続し、ワークプログラムの実施等でシナジー効果を出したい。

STAR、TIG の主査、各 WG 主査、メンテナンスグループに謝辞を述べるとともに、メンバーの協力のもと、CASCO の成功を持続したい。

●議題 7 CASCO strategy

副議長より、Strategic Directions(2022-2026)作成経緯、投票の際のコメントの一部は ToR の議論(議題 9)で検討されること等の説明があった。

Strategic Directions(2022-2026)に関連し、以下の質疑があった。

- コロナ禍を経験してリモート審査/技術の重要性が非常に高まっている中、何らかの指針は必要と思われるが、一方で重複は避けたい。CASCO はどう考えるか→DIN からの新提案に関しては未だ投票が終わっていないが、(複数ではなく)単一の規格を持つことがより良いと考えている
- AI や SMART 規格などの新しい技術への対応が考慮されていないのではないか→Strategic Directions(2022-2026)は ISO 戦略 2030 に沿ったものなので(明示されていないが)当然のことながら新技術を考慮している。SMART 規格については、適合性評価は影響を受けると考えており、ISO SMART プログラムに関与・貢献している。

●議題 8 Roadmap

<8.1NWIP ballot Remote auditing - update and status>

事務局長より説明。DIN の NWIP は 5/27 まで投票中だが、可決されて WG61 (ISO/IEC 17012 開発)が設置される場合に以下の 2 つを承認するかどうかを問われた。

- 共同主査制とし、開発途上国からの選出を奨励したい
- メンターシップ。WG57(17043 開発)でのパイロットプロジェクトが成功したので、また実施したい

参加者からは賛成の声のみ。

NWIP そのものについての以下のような意見も示された(ここはその議論の場ではないとの事務局の統制がほどほど効いていて、各自淡々と意見を述べ、議論が紛糾することはなかった)。

- 指針作りに参加する専門家は広く関係者から集めなければならない
- この 2 年のコロナ禍の経験で、適合性評価機関は様々な経験を積んだ。審査だけではなくいろいろな活動がリモートで行われた。指針を作る場合、すべてのリモート活動や技術をカバーすべき
- IAF/ILAC 文書を初めいろいろな文書が既に作られているので、それらとの重複を避ける必要がある(→IAF/ILAC とは JSG で議論する予定)
- NWIP の scope を拡大(マネジメントシステム認証に限定せず)することは可能か(→拡大にあたり再度投票が必要になる)

(ネット環境のため参加中断)

<8.2 SR ballots in 2022 of ISO/IEC17020 and ISO/IEC 17027/ISO/IEC 17024>

2022 年 7 月に SR が行われる予定の上記規格につき、事務局より提案あり。

◇ISO/IEC17020

過去に clarification request が複数あったこと、ILAC 文書と ISO の clarification に矛盾があると苦情があったこと等を踏まえ、事務局より、SR にあたり説明文書を添え(確認ではなく)改定を推奨することとしたいとの提案。賛成が多勢を占めたが、17020 に何ら問題を感じないので改定の必要性を覚えないう意見もあった。また SR を待たずに、改定を求める NWIP を出してしまう方がいいのではという意見もあった(SR が 7 月開

始なのでタイムライン的にさほど変わらないので却下)。

◇ISO/IEC 17027 及び ISO/IEC 17024

コロナ禍で試験にリモート技術や AI の活用が広がったこともあり、17024 に改定が必要であると思われ、また改定の機会を利用して 17027 との統合も行うべきとして、17020 と同様に SR にあたり説明文書を添え(確認ではなく)改定を推奨することとしたいと事務局より提案。

賛成多数であったが、このような大規模改定は対面会議が行える状況になるまで待つべきという意見もあった。

上記 2 件とも、状況の説明をした文書を添えて SR 投票を行うことが了承された。ただし、改定とするか確認とするかは各メンバーの判断によるものなので、明示的に改定を推奨することはしない。

●議題 9 CASCO ToR/mandate in ISO Rules of Procedure

事務局長より説明。ToR の改定を進めてきたが(適合性評価の対象の明確化、validation/verification の追加など)、Strategic Directions(2022-2026)の議論が並行して行われたため、この内容に影響されるかもしれないので、ToR の確定(ISO 理事会承認要)を保留にした。Strategic Directions(2022-2026)が 2022 年 2 月に投票終了、確定したので、この折に出されたコメント等を考慮して、ToR の見直しを進めるかどうかを決めたい。見直しを行う場合、Task Group を作る。

見直しを進めることに反対はなかったが、見直しにあたっては広く意見を求めるべきとの意見があり、Task Group は Structure の見直しを行ったグループを拡大して作るようになった。また、総会期間中に開催された Interactive session で出たコメントもインプットとして見直しの折に考慮する。

●議題 10 CASCO 事務局報告

事務局長より報告(N1258 に沿った内容)。例年の報告事項(メンバー数、WG 活動状況、規格発行や会議開催の状況、等)に加え、SMART 規格のプログラムに参与していることが報告された。SMART 規格については、5 月 30 日にワークショップを行うので各国で広く参加を募ってほしいとのこと。

●議題11 Task group future toolbox: latest developments

主査よりこれまでの活動の概要報告。2020 年 2 月に活動を開始し 2021 年 5 月までの間に 3 回の会合を持った。その結果、3 つのサブグループを作り活動することになった。活動は継続中で CPC に適宜報告する、等。

参加者から、CASCO toolbox の規格を、1 つの共通規格と適合性評価の種類に応じて追加部分の規格という構成にするというアイデアはなかったのか(マネジメントシステム規格の共通構造のようなものを作る)、これは規格のユーザーの利便性を向上させると思われるという問いかけがあった。主査からは当初そのような議論もあったが、現在の CASCO toolbox をどのように使うかという方向に進むことになったとの回答があ

った。

●議題 12 IEC CAB report

IEC/CAB 議長、Mr. Shawn Paulsen より報告。

IEC の概要、IEC/CAB の活動、IEC 適合性評価システムの紹介の他、SDGs に関する TF、SMART 及び適合性評価に関する TF を作り活動していること、IEC Strategic Plan の 3 つのテーマ(-enabling a digital and all electric society, -fostering a sustainable world, -leading on trust, inclusion and collaboration)などの説明があった。

●議題 13 CPC 報告

<13.1. Update main items covered 2021>

議長より報告(N1256 に沿った内容)。

IAF CertSearch Database については、CPC 会合でコンセンサスが取れなかった事項であるため、ここでも自論の表明があった(ISO は IAF への支持を示すべきという主旨)。

<13.2. Ad hoc group monitoring global developments relevant to conformity assessment>

Ad hoc group の ToR が承認されたので(4/21 まで投票)、追って参加者を募りたいとのこと。

この Ad hoc group の構成を懸念するコメントあり(幅広い範囲をカバーするので適切な構成にするのが困難ではないか、予算を取ってプロのコンサルタントを雇うなどを検討すべきではないか)。

<13.3. ISO/IEC Directives clause 33>

事務局長よりこれまでの経緯の説明。内容の変更は伴わず明確化のための修正を意図していたが、IEC/CAB 側の承認を得られなかった。複数回、CAB 事務局と議論を重ねたが、結局 CAB での投票で否決された。また ISO supplement を作るというアイデアもあったが、ISO のルール上不可能。この状況から、改定をあきらめ、説明資料やトレーニング資料を作り、Directives に対する理解を促すように努めることが事務局より提案された。

特に反対意見無く、事務局提案を支持。

●議題 14 STAR 報告

主査(Ms.Stefanie Vehring)より報告(N1260 に沿った内容)。

2021 年に circular economy に対する適合性評価の便益に関する文書作りを開始し、2022 年中に公表予定、等。

●議題 15 TIG 報告

主査(Mr. Graeme Drake)より報告(N1259 に沿った内容)。

Technical expert group(TEG)の新設を計画したこと、sustainability standards を 8 件分析したが現時点で

CASCO の方針を作るには premature であると結論したこと、等。

●議題 16 Joint Strategic Group IAF-ILAC-ISO

ILAC 議長に代わり事務総長より報告 (JSG の議長は 1 年毎の持ち回りで現在 ILAC が議長)。N1250 に沿った内容。

IAF FAQs に関し、本来は ISO の clarification process で扱うべきではないかという見方もあるようだが、コロナ禍で活動を有効に維持していくために始めたものであり、CASCO とは適切なコミュニケーションをはかっていくことが大事とのコメントがあった。

●議題 17 Report back from interactive sessions: Sessions on the Review of CASCO Structure

2回にわたって行われたセッションに100名以上が参加し、7グループに分かれて議論。各グループのファシリテーターがコメントし、概ね、次のような内容。Policy(政策)は明確であるべきで、それを開発/実施するための構造が必要、しかしCASCOには力がない。規制当局やステークホルダーをもっと積極的に関与させるべき。規格はいかに使われるかが重要だが、CASCOにはその影響力が弱い。より戦略的なコミュニケーションに焦点を当てるべき、等々。

セッションで出たコメントはCASCO ToRの見直しで考慮する。

●議題18 Report back from interactive session: Sessions on the follow up on the dialog sessions

Regional Engagement: with CASCO members and liaisons

本セッションでは、課題とそれへの対応の提案が示され、グループで議論する形であったが、どのグループでも全般的に提案に対し支持、特に課題 1 のメンターシッププログラムへの支持が強く示されたとのこと。また、バーチャル参加の便益を最大限に利用すべきとの意見もあったが、言語のバリアにも配慮が必要とのコメントもあった。議長/副議長及び事務局でコメントの分析をし、現在の提案をより確固たるものにする。

●議題 19 ISO Capacity building and conformity assessment training activities for 2022

●議題 20 New training module on CA: ISO Digital Learning Solutions (DLS) Toolkit

ISO/CS の Capacity Building Unit より報告。

APDC (Action Plan for Developing Countries) 2021-2025、ISO メンバーで開発途上国の占める割合の高いこと(81%)等を説明の上、2021 年に実施した適合性評価関連の下記のワークショップ(バーチャル)について報告。

- ISO/IEC 17065&17067
- Conformity Assessment and regulators
- Stakeholder engagement in ISO/CASCO work

さらに 2022 年には、Conformity Assessment and regulators、Stakeholder engagement in ISO/CASCO work を各 2 回開催する他、improving market access も開催。

また、e-Learning コースを開発中で(国際規格の開発に関するもの 3 本、CASCO toolbox に関するもの 1

本)で、CASCO toolbox に関するものは 2022 年 12 月にリリース予定。

●議題21 Drafting and approval of plenary resolutions

Resolution 案を確認。Resolution committee で確認後、回覧／投票。

●議題 22 Any other business

議長及び事務局長より以下の説明があった。

- 議題 25 以降に報告書を示してある。報告書を提出いただいた WG 主査やリエゾン団体各位に感謝する。
- ISO 総会が 9 月に開催され、thematic session がある。何か提案できるトピックがあればお知らせ願いたい。ANSI は何らかの提案を予定しているとのコメントあり。

●議題23 Date and place of plenary meeting in 2023

過去3年、総会がリモート開催になり、未だ不確定要素はあるが次回は対面開催をしたい。今後3年の総会ホストを募集する。2023年のホストの申し出がない場合、ISOがホストとなりジュネーブで今回と同時期に開催する。

●議題 24 閉会

閉会にあたり、議長が挨拶。時差があるにもかかわらず参加したメンバー各位、STAR/TIG 主査、WG 主査、リエゾン団体に深謝。

<<interactive sessions>>

● Review of CASCO Structure

約 70 名が参加。

セッションに先立ち、議長より CASCO 組織に関するこれまでの経緯を説明(2020 年に議論を開始、CPC/STAR/TIG でサーベイを行い、CASCO 全体でも意見聴取を行った。本セッションでもさらに意見を求める等)。続いて事務局長よりセッションの流れと、総会中(28 日)に報告し、今後どうするかを決定する等の説明があった。

その後、3つのグループに分かれ、下記の2項目(N1287 参照)について意見を出し合った。

- What is the policy role of CASCO in relation to conformity assessment within the ISO system?
- What should be the structure to support this role? Under this question, the role and membership of the CPC, as well as the role of the plenary shall be discussed.

グループセッションの後は流れ解散だったので、他グループでの議論がどのようなものだったかは不明。報告書の参加したグループでは、以下のような意見が出た。

- Policy(政策)と規格開発は区別して考えるべき
- 政策は clear & proactive であるべき
- 政策の及ぶ範囲がどこかをはっきりさせるべき
- ISO/IEC の政策に沿ったもので、ISO システムをサポートするもの

● Follow up dialogue sessions Regional Engagement with CASCO members and A liaisons

約 40 名が参加。

セッションに先立ち、副議長よりこれまでの経緯を説明:2020 年 3 月から 2021 年 10 月にかけて、メンバーリエゾンとの対話を行った。その中から 9 の課題(challenge)が特定され、それらに対応するために、メンターシップの試みや WG の information session などを行った。本セッションでは、9 の課題のうちの 3 つを取り上げ、まず議論のきっかけとして各課題に対する対応の提案が示され、議論の中で課題に対応するための具体的なプロジェクトや実際のイニシアティブなどを上げるという流れ。3 つの課題と各対応の提案は以下。

| | 課題 | 提案 |
|---|---|---|
| 1 | Engage new members and establish efficient NMCs to collect national positions | Mentoring programme to set up a CASCO National Mirror Committee (NMC) |
| 2 | National stakeholder awareness and engagement with ISO/CASCO | Engage stakeholders: training & practice |
| 3 | Lack of national expertise and available resources to participate in ISO/CASCO activities | Working group partnerships |

グループに分かれての議論は、課題に対しあらかじめ設定された質問(N1288 参照)に答えていく形で進められた。報告者は、課題 2 に割り当てられたが、下記のように設問が多く深く議論する時間はなかった。

- What do you think of this proposal? Do you see it as something useful and realistic? If you do not support this proposal, please explain why?
- What could be the key elements and objectives of such a programme?
- What criteria do you see as important to make the programme work?
- Consider how to exploit the regional structures, leverage the regional synergies.
- Discuss who such a “focal contact” could be? What essential attributes would be necessary?
- Do you have experience with a similar programme in our region?
- Would your country be willing to provide resources for a pilot project?
- Would your country be willing to participate in such a project?

あらかじめ示された提案に対しては支持で、誰がステークホルダーであるかを明確にすべき、トレーニングを行う場合にはテイラーメイド的なものが効果的、IAF/ILAC 傘下の地域グループが活用できる、既に地域で適合性評価について説明するセッションなどの例はある、NMC の事務局を focal point にすればよい、等のコメントがあった。

● Meeting the ISO and CASCO leaders

ISO 事務総長／副事務総長、CASCO 議長／副議長がパネリストとして登壇。CASCO 事務局長が進行を務め、ISO 及び CASCO の概要、取り巻く状況、課題／機会などを語った。約 70 名が参加。

ISO 事務総長は、ISO として大きく捉えている事項として

- この2年で規格開発の環境が大きく変わり(コロナ前は85%の会議が対面だったが、100%バーチャルの状態になった)、今後どのようにあるべきか(一定のフィジカルコミュニケーションは必要)
- 気候変動への対応
- デジタル化への対応、特に SMART 規格

副事務総長は、規格のマーケットが拡大していること(特にIT、健康、食品安全などの分野)、持続可能性に対しバリューチェーンが共有言語を持つ必要があり、そこに規格の需要があると述べた。また、COP26での国連のグデレス事務総長のスピーチ(温室効果ガスの排出削減やネットゼロ目標に関し、言葉の意味や評価基準が異なるため、信頼性が損なわれ、混乱が生じており、定義や測定方法を統一する必要がある)に触れ、適合性評価の重要性に言及するとともに、ISO はロンドン宣言を行い、サステナビリティプログラムを設定したと述べた。

CASCO 議長は、CASCO toolbox の概要を説明し、GFSI などをはじめとする様々なセクターで活用されていること、適合性評価にデジタル化の波が押し寄せていること、ESG 分野での attestation の需要が高まっていること、等を述べた。

副議長は、CASCO は diversity & inclusiveness の向上に努め、開発途上国からのコンビナを養成するためのメンターシップのパイロットプロジェクトを実施したこと、WG の information session を行ったことなどを述べた。

参加者からは、ISO の foresight framework についての質問があり、トレンドを捉え注視すべき key element を特定している等の説明があった。

また、認定及び認証の改善を CASCO はどう考えるのかという質問もあり、neutrality 原則から CASCO は自ら認定/認証を行う立場ではなく直接的に何かを行うことはないが、JSG で継続的に議論もしており、改善に貢献していくとの回答。

● Workshop “Conformity assessment: Embracing the present and preparing for future”

約70名が参加。3名のパネリストの講演の後、5グループに分かれて議論を行うという構成。

各パネリストの講演の概要は以下。

1) Mr. Francois Coallier (JTC1/SC41 議長、IEC/SEG12 コンビナなどを務める IT 分野の専門家)

Trustworthiness of ‘Smart’ Systems という題で講演。

様々なセクターで IT 関連の広範囲にわたる側面で数多くの要求事項が作られている現実があり、さらにモノからシステムとなり、システム(及び System of Systems)の複雑さが増し、さらに複雑な技術と統合するようになってきている。このような複雑なシステム及び System of Systems の信頼性をどう考えればよいか。Trustworthiness の評価は、“doing the right thing”(機能や特性)、“done well”(ガバナンス、開発、運用などのライフサイクルプロセス)、“done the right way”(エンジニアリング、アーキテクチャ、技術)を評価することであると考える。

2) Ms. Athina Panayiotou (Cyprus Organization for Standardization、各種 MS 審査に造詣が深い)

Sustainability, Governance and Conformity Assessment Embracing the Present and Preparing for the Future

という題で講演。

昨今、サステナビリティやガバナンスに関連する様々な規格が開発されており(37101、20121、26000、45003、22525、21416、37001、21101、20611、32210 など)、指針を国ごとに要求事項にしているものもある。ジェンダー、マネーロンダリング、いじめ、ガバナンス、透明性などが、現在及び将来、適合性評価の対象として注目されるだろう。実際、財務評価の一部として、environmental and social due diligence の監査が行われるようになっており、贈収賄に関しては各国の法律で管理されているが適合性評価のニーズが高まっている。ジェンダーについては長く取り組んでいるが、まだ定義も定まらずジェンダー平等やジェンダーインクルーシブに対する要求事項ができあがるにはまだ道は遠いだろう。

3) Mr. Daniele Pernigotti (TC207/SC2 議長、IT207/SC7/WG8 コンビナなどを務める環境/気候変動分野の専門家)

Conformity Assessment to Support Climate Action という題で講演。

CO2 の 1 トンはどこでも 1 トンでなければならず、一貫した信頼のおける MRV (monitoring, reporting and verification) が重要である。温室効果ガス (GHG) に対する妥当性確認/検証に関連し ISO は既に一連の規格を開発しており、任意のスキームとして世界中で実施されている。また、強制スキーム (EU ETS、ICAO CORSIA、EU MRV など) でも ISO 規格が使われていることは注目すべき。

講演後、グループに分かれ、・各講演を聞いてまず思ったこと、・適合性評価に対する関連/影響、・とり得る行動について話し合った。

その後、各グループのファシリテーターがまとめを報告。3 つの講演に対し大小さまざま、個別各論な意見が出ており、概略するのは難しいが、総体として、適合性評価の対象になるであろうモノをどうやって審査するか、規格はどのように変わらなければならないか、これまで以上に広いステークホルダーに適合性評価を可視化する必要がある、等々のコメントが共通していたように思う。

最後に CASCO 議長が CASCO week への参加への謝辞と、本ワークショップのファシリテーターが全員女性であったためジェンダー平等が守られておらず次回は半々にするように努力したいとの冗談めかした発言で締めくくった。

以上